

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## 農の駅 : Bottom-upの拠点

著者	村田 翔太郎
出版者	法政大学大学院デザイン工学研究科
雑誌名	法政大学大学院紀要. デザイン工学研究科編
巻	5
発行年	2016-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/12903">http://hdl.handle.net/10114/12903</a>

# 農の駅

## -Bottom-up の拠点 -

Agricultural Station  
- Base of "Bottom Up" -

村田翔太郎

ShotaroMurata

主査 渡邊真理 副査 赤松佳珠子・川久保俊

法政大学大学院デザイン工学研究科建築学専攻修士課程

This study from the criticism of the construction process of buildings in urban areas, and re-interpret the rural community, originally theWhere life in, culture, brings out the charm, think about the architecture to become an opportunity to make a new connection.

**Key Words** : rural, agriculture, farmer, kijimadaira village, location, landscape

### 1. はじめに

本研究は都市部における建築物の構築プロセスへの批判から、農村のコミュニティを再解釈し、もともとその場所にある生活、文化、魅力を引き立て、新たなつながりを生むきっかけになる建築について考える。

### 2. 研究

#### (1) 農村集落

農村集落を根本的なつながりである農業を通じた共同性の変遷を考察する。「農村型コミュニティ」とは、共同体に一体化する（ないしは吸収される）個人 とも言うべき関係のあり方を指し、それぞれの個人が、ある種の情緒的（ないしは非言語的）つながりの感覚をベースに、一定の「同質性」ということを前提として、凝集度の強い形で結びつくような関係性をいう。近年、地域人材の変化に伴い、魅力を開花させている農村を現れている現状を把握する。

#### (2) 敷地 木島平村

木島平は、市町村合併などで周辺自治体が再編されて行く「平成の大合併」のなかで、木島平スキー場を考慮し、この村は「合併しない」という意思を示した自治体です。木島平村は、1955年に旧穂高村、住郷村、上木島平村の3村が合併して誕生した。合併当時は8,400人いた人口も、今は4,942人（国税調査、2010年）まで減少している。高齢化率は32.2%で、全国平均22.1%長野県平均の25.5%を大きく上回っている。

地形は樽川、馬曲川の扇状地、海拔320～750mの間に26の集落を形成しています。南に高社山（1351.5m：写真右）、東南に高標山（1747.9m）、そして東はカヤの平高原、北は毛無山系と三方を山に囲まれています。

気候は内陸性気候で寒暖の差が激しく、年平均気温は11℃。長野県内でも有数の豪雪地帯で、冬季間の積雪期間は110日間で、積雪深は1.5～2.0mにも達し、積雪期間の平均降水量は1,315mm、長野市の938mmと比較すると40%も多い。

豊かな自然環境により、豊かな田園風景が広がる集落、温泉がでる馬曲の集落、糠千のような隔離された集落、観光資源のスキー場など地形ごとに多様な性格がある。近年の村民の動きを考察すると、観光などの一時的な外部との接点を向上よりも農のつながりを作り上げることにより、賑わいを作り出すことができる。



### 3. 提案 プログラム

少しずつ増やす

スキー場などの外部の人との一時的な接点を強化するのではなく、1%ずつゆっくり地域人口の取り戻しを進める。一つは、一度にたくさんの人口を流入させて一斉高齢化を招いた「団地の失敗」を繰り返してはいけないということである。人口問題は、あせって集中的な是正を図ると、必ず長期的な反動がやってくる。田園回帰は、ゆっくり、じっくり進めたい。もう一つは、あまり一度にたくさんの人が、小規模なコミュニティに移住すると、社会的インパクトが大きすぎて、地元住民は困ってしまう。私の住んでいる集落は、200人くらいの比較的大きな集落ですが、この6-7年、私たちも含めて毎年1家族が移住している。これくらいのペースが、「あれは誰じゃったかいねー」とお年寄りにも混乱せずに、一番よい。

合わせ技

地域内の経済循環を進めていくためには、小規模なものであっても暮らしに必要な生業は切り捨てずに活かしていくことが大切。その場合、分野ごとに縦割りで考えると、多くの生業は、小規模な地域で成り立たず、消えていく。関係しそうな生業、将来的に関わる生業をコンプレックスすることで労働を通した結びつきを再構築する。

将来ビジョンより、木島平村の生活の根底にある農業の結びつきを再構築する。村の中で農業から派生した産業がある。それらをテーマ型コミュニティのようにそれぞれが独立した立場をとるのではなく、それぞれの産業が関わりを持たせることにより、ヘテロ化している農業に関わる村民が再び農の結びつきを構築する。木島平村で発生している農を通した将来性のある産業が3つある。一つ目は、豊かな水資源を生かした酒造りです。日本酒だけでなく、ヤーコン、山葡萄などを利用した蒸留酒の製造が米に続き起きている。蒸留酒であれば、専業農家だけでなく、様々な形態の農家も関わるができる。

二つ目は、雪中貯蔵です。日本酒やりんごなどが現在行われている。雪室作りが地域の協力が必要なため共同社会の構築のきっかけになりうる。

三つ目は、アートです。半農半Xなど多様な農村の生活が見られます。アーティストインレジデンスではアーティストは文化活動を通じて村の人と交流して村に賑わいを生む。しかし、これでは訪問者の存在が強い。そこで、農作業で体を動かすことが制作活動に効果をもたらすこと生かし、ファーマーズインレジデンスを行う。アーティストが農業体験をしながら、制作活動をしたり、長中期農業体験者や新規就農者の宿泊施設になる。

少しずつ関係のあるが同じでないものを組み合わせることで、労働を通した様々な結びつきを構築する。農

業だけでなく、その他の生業も営まれ、ヘテロ化している農村で農を基盤を尊重した、閉じすぎず、開きすぎの独自の結びつきを構築する農の駅を提案する。木島平村では、農業振興公社という、新規就農者の研修や循環型農業の中止を担う農業法人が存在する。農業振興公社を再構築することによって農の駅を提案する。農村は、都心部と違い、テーマ型コミュニティでは、活気を得ることは難しいと考える。農業を根底とした農村独自のつながりを生かす、様々な活動の中心となる場を作ることによって、将来の希望を作り出す。農から派生した産業を複合させることにより、共同社会を構築する新たな村の中心を作り出そうと考えているが、農のつながりによる共同社会の構築は、水路の管理、草刈りなど、つながりを生むのは日常の場では田や畑などの大地である。

農のつながりは風景の中で構築されている。農の中心の場を作るには、風景を建築に組み込む必要がある。風景の構成要素の中で、風景にアイデンティティを与えるものに住宅が大きく関わる。村民の生活変化によって、増改築を繰り返された住宅を考察する。





#### 4. 提案 建築的アプローチ

増改築に場所の精神が受け継がれている。

見かけの特徴が何らかの人間の営みの集中を示す具体的な証拠である場合のような直接的で明らかな意味においても、あるいは人間の価値と意図を反映するようなもっと微妙な意味においても、場合が景観として理解され経験される時には、外見はすべての場所の重要な特徴である。増改築の構築を考察することにより、「場所の永遠性」あるいは場所の外見と精神における連続性を作り出す手法を考察する。

増改築の風景からまだ終わっていない、これからも成長していくと感じる。この拡張していく感じを詩趣を用いて考察する。

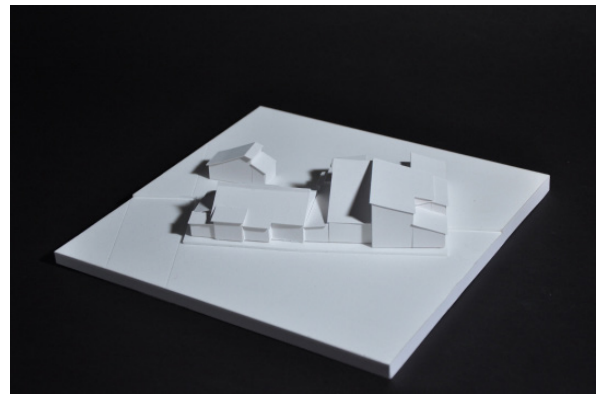
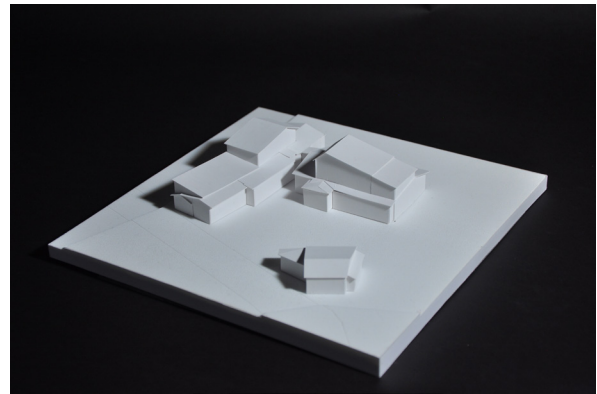
数多くあるサンプルから特徴的な住居を10個取り上げてまとめる。

風景的建築を語るために、私は「詩趣 poetry」なるモノサシを導入しようと思う。ここでいう「詩趣」とは無論類比【アナロジー】であるが、それは一つにはフォルマリズム的な異化の作用を指して、そしていま一つにはレヴィ＝ストロースが「野生の」と呼んだような世界との根源的な関わり方を指してそう呼ぶのである。一見異なる方向性を持ったこれら二つの志向が、「詩」という現象態のうちに合流しているのを認める。ロシア・フォルマリズムは「詩的」言語と「日常的」言語を区別する際、「異化 *ostranenie*」（シクロフスキー）なる用語を用いた。意味内容【シニフィエ】の伝達を主たる目的とし透明化した「日常的な」言語に対して、「詩的」言語はそのような透明化に抗い、意味作用を「遅延させ」、言語それ自体を「前景化」（ムカジョフスキー）させる。

詩の前景化作用を担うのは、韻律や反復そして隠喩といった詩独自の形式を用いて増築の手法を考察する。他方で、レヴィ＝ストロースが「詩的叡智」とよぶような意味での「詩趣」がある。レヴィ＝ストロースはそれを「野生の思考」の特徴として挙げている。「野生の思考」は論理的一貫性を顧慮する抽象合理的思考によってではなく、その都度の「現象」との立会いの中で神話を創造する。ここに働くのが「詩的叡智」である。その現象への関わり方は「即席に作り上げられる」ものであり、彼はそれを指して「ブリコラージュ」を農民の飾り気のない増築よく感じる。



木島平村の風景



サンプリング模型

#### 5. 結論

私たちにとって日常的な世界がすでに記号的ないし平均的世界である。今、成長の時代から成熟の時代に移り変わってきている。ありふれた建築の中で我々は建築を意識しない。あたかも意味内容【シニフィエ】だけを読み取るように、建築は透明化し、我々の意識は専ら機能だけに向けられている。例えば毎日そこにいる教室の梁や窓を我々は鮮やかに思い出せるだろうか。一方、本提案に於いては建築は「前景化」し、使う人の意識は建築に差し向けられる。そこでは、村でこれから様々な活動を生む。これからの地方都市には、様々なものを受け止める風景的建築が必要になるだろう。

#### 6. 参考文献

- 場所の現象学 / エドワード・レルフ著；高野岳彦，阿部隆，石山美也子訳 || 東京：筑摩書房，1999.3  
空間の経験 / イーファー・トゥアン著；山本浩訳 || 東京：筑摩書房，1993.11  
今和次郎と考現学：暮らしの"今"をとらえた「目」と「手」 || 東京：河出書房新社，2013.1  
田舎力：ヒト・夢・カネが集まる5つの法則 / 金丸弘美著 || 東京：日本放送出版協会，2009.8  
食と農の経済学：現代の食料・農業・農村を考える / 橋本卓爾 [ほか] 編著 京都：ミネルヴァ書房，2006.4